現代社会を『関係性』という観点から考える

㉜家族における「ケア」の在り方　映画「どうすればよかったか」から考える

更生保護官署職員　三浦恵子（社会福祉士・精神保健福祉士）

１　はじめに

連載 14 では**『「開く」ことと「閉じる」こと』**と題して私見を述べさせていただき、それに続くかたちで、連載 15 では**『つながりが支えるこころ』**と題して、社会的には容認されないような要求を次々と親族や支援者に行うことで結果的に物理的にも心理的にも「閉じた」生活となり社会的孤立に至り心身状態の悪化を招いてしまった高齢者（単身生活者）の事例について考察を行いました。連載 16 では、連載 14、15 の流れを引き継ぐかたちで、**『「見える」ことと「見えない」こと』**という切り口で、現代社会を関係性という観点から見直してみました。それを受けるかたちで連載 17 では、これまでの連載を踏まえ、**「地域社会」との「関わり方」を考える**と題して、まさに「地域社会」との「関わり方」を私なりに考察してみました。

つまり、本連載では**「地域社会」で生きるということ**についてほぼ一貫して考えてきたともいえます。そして今まさに現代社会においては、（望まない）「孤立」「孤独」が問題となっています。支援機関とつながらないまま命を落としてしまうような事態になったり、拡大自殺的な事件が発生する例もあまたあります。家族介護が行き詰ってしまった上での介護殺人、子育てに悩んだ末の子殺しなどがその例であると言えます。

こうした点について連載 18 では**「自分は誰かとつながっている」という感覚があるかということ**と題して問題提起をさせていただき、続く連載 19 回では**「自分は誰かとつながっている」という感覚**を持つために私が必要だと痛感している**『関係性』をメンテナンスをする～「当たり前」と思うことの陥穽**について、連載 20 では、**『関係性』をメンテナンスをする～「当たり前」と思うことの陥穽**について、それぞれコロナ禍の中を生きていくうえでの関係性について私見を述べさせていただき、連載 21 では、**Society から Home へ矮小化していく社会**について私見を述べさせていただきました。

本連載も 5 年を超え、コロナ禍はじめ連載開始時と社会情勢は大きく変化しています。私自身も専門性の殻に閉じこもることなく、業務上・業務外での連携において学んだことや様々な関わりの中で学びまた考えさせられたことを連載原稿に落とし込み、主題そのものはぶれることなく視野をより広くして原稿を記載していきたいと考えています。

連載 23 では「自助、共助、公助」の他に、制度が既存のものとして含んでいる**「家族助」**について、地域包括ケアシステムの在り方について私見を述べさせていただきました。連載 24 ではすこし角度を変え、**自分が「知っている」だけの世界で生きることの危うさ**と題し、私自身が実際に直面したり間接的に関わったことをベースに、「知っている」ことだけの生活で生きるということに含まれる一種の「危うさ」、「知らない」ことが「意識しない排他性」につながることなどについて、引き続き連載 25 では**「知らないことが不安や排除につながる」ということ**というテーマでそれぞれ私見を述べさせていただきました。連載 26 では、大学生に刑事政策と司法あるいは更生保護について話をする機会に感じたことをベースに**「今の社会」に対する若者の不安に、大人としてどう向き合うのか」**というテーマで私見を述べさせていただき、続く連載 27 では、私が昨今感じてい

る**「理想とされる家族は今や『描かれるもの』の中にあるものか」**ということにつき、課題提起の意味合いをこめ私見を述べさせていただきました。
その後の連載 28（連載 29 と記載していますが 28 に修正します）では**「自分には支えてくれる人がいる」「まだできることがある」と誰もが感じることができる社会へ**と題して、「愛と仕事」（フロイト）及び「居場所と出番」（犯罪対策閣僚会議）に言及しました。それを受けて連載 29 は、家族介護当事者の立場から、**「選べない日々」を過ごす人々への「まなざし」**と題して、様々な境遇のただなかにある人を「社会がどう見るか」という点について、私見を述べさせていただきました。これに関連し、直近の連載第 30 回では「改めて「介護は誰が担うべきか　家族・親族・地域社会の関係性を踏まえた一考察」として、連載 6**「刑事政策から見た「介護」～高齢犯罪者による殺人事件を一例として」**を更に深めるかたちで、厚生労働省のデータ等にも言及しつつ、家族アセスメントというう観点から更に掘下げて私見を述べました。連載 31 では久々に少年非行をとりあげ**「非行とは行うものなのか巻き込まれるものなのか」**について「関係性」の視点で検討しました。
　今回は、令和 6 年 12 月に公開されたドキュメンタリー映画「どうすればよかったか」を私が「関係性」の観点から視聴して感じたことを軸に、家族のなかでの「ケア」について考えていきたいと思います。
　なお、本稿は、映画「どうすればよかったか」の内容・構成などを言及するものでも、映画評論でもありません。あくまで、**家族における「ケア」の在り方**を考えるための軸としてこの映画を位置付けていることを申し添えます。

１　「家族がケアを担う」とき

「家族がケアを担うとき」という言葉から、どのようなことが想起されるでしょう。
　妊娠から出産に至るまでの準備
　育児
　高齢となった両親などの介護
　これらは、一見すると、当事者やその家族が家庭内で対応すべきこと、つまり。「ケアを担う」べきことのように思われます。
　介護に関していえば、平成 12 年の介護保険制度の導入によって介護の社会化が進められたようにも思われます。しかし、介護保険導入前・導入後にわたって家族・親族の介護や介護支援に従事してきた私の実感は
　　家族介護のただなかにあっては、社会資源の活用にまで思いが至らない
といったことが十分にありえる、というものです。
　また、直接的なケアや社会資源を利用するための費用負担、ケアを担う関係機関との調整連絡等を含め家族が担うことが多々あるのも現状です。
　「家庭や家族は福祉の含み資産である」といった内容の言葉を、私は学生時代に福祉制度を学びそれを実践していく過程でたびたび耳にしてきました。そして、私自身が当事者として制度利用をする際に、改めてこの言葉の重みを実感しました。
　「家族がケアを担う」ときというのは、ライフプランのなかで（一見）既に織り込みずみのようなこともあれば、突然その事態に見舞われるということもあります。
　前者、すなわち、個々のライフプランのなかで（一見）既に織り込みずみ、というものというものの例として
　　〇歳頃に結婚し、子どもは〇歳頃までに出産、小学校入学とともに職場復帰
ということが挙げられるかもしれません。
　しかし、実際に「家族をつくり、家庭を営む」ということは、いくら緻密にプランを立てても、プランが緻密であるからでこそ、うまくいかないことが多々あるということは、

対人援助職である前に、「家庭」「家族」のメンバーであることについて思いを致せば、それが容易ではないことはわかると思います。

前者でも容易ではないのに、後者、つまり、「突然その事態に見舞われること」の大変さは推して知るべしでしょう。急な事故や病気だけではなく、「予期せぬ妊娠」「家族が犯罪被害に巻き込まれケアを必要とする事態となった」あるいは「家族が突然逮捕された。当該家族メンバーへの対応のみならず、混乱する他の家族メンバーへのケアも行わなければならない」といったより多くのことが想定されます。

一方で、家族の規模（世帯員数）は年々縮小しています。家族機能の変容が指摘されて久しいですが、それ以前に、家族・親族の「数」が減っていることで、「質」を問う以前に「量」（ケアに対応できるインフォーマルな人的資源）が減っていることも、「家族がケアを担う」ときを考える際には、念頭においておくべきだと考えます。

更に、人間は自分がリアルに経験していないことや想定していないことに冷静に対処することは決して容易ではないということも考慮にいれるべきでしょう。

対人援助職として業務に取り組む際には、業務に必要な理念や知識、技能を身に付けるようにし、かつ、組織としての指導やSVにより対人援助職としての訓練を経て現場に立ちます。それと比較すれば、家族メンバーとして家庭のなかで役割を果たす、つまり、「家族がケアを担う」ということが、相応の発達年齢になれば自然に「できるもの」と考えられていることについて、私は疑問なしとしません。

これについて「愛があれば大丈夫」「家族愛や家族の紐帯がある」と考えることは、ロマンチックかもしれまでんが、あまりに安直で現実的ではありません。家族だからこそ様々な感情があり、適切な距離感を取ることは難しいことがあります。たとえ愛があったとしても、それは課題の抱え込みにつながることも往々にしてあり、追い詰められたうえでの拡大死（心中事案）が発生していることに思いをいたすべきでしょう。

2　「ケアを担う」家族を考えるときに必要な視点

では、先述した「家族愛」なるものが存在し、あるいは対人援助職の訓練のように理念や知識、技能があれば、家族はケアを担っていけるのでしょうか。「ケアを担う」ときに備えて、結婚・出産などに際しては予め免許取得や訓練を義務付ける、というところまできてしまうと、もはや一種のディストピア小説・映画等での出来事になってしまうでしょう。子どもを持つこと（ケアを担うこと）を免許制とする近未来の日本を描いたフィクション「星屑家族」（幌山あき）では、扶養審査官による審査に合格せず免許を得ることができない人々に対する差別もリアルに描かれています

昨今では、子育てや介護と仕事の両立、教育などに関して、行政の様々なポータルサイトが充実してきました。検索すればまずそれらにヒットし適切な相談窓口の玄関に案内するサービスの一つです。それでもなお、子どもの緊急の病気等の際、匿名掲示板に状況を書き込みさらには「緊急！」と付して回答を求めたり、根拠に乏しいと思われる情報発信を鵜呑みにしてしまうことも散見されます。そうした行動を愚かしいと断罪することは簡単ですが、適切な相手に「相談する」ことは実は難しいということも考慮すべきでしょう。また、こうした行動の背景には、正確な情報を得るということだけではなく、「大変ですね」「私もそうでした」「頑張ってください」といった「共感」を求める気持ちもあるでしょう。ケアという場面に限らず人間は、正解だけではなく情緒的な交流・共感なしでは、生活していくことが難しいのだと考えています。

また、現実世界で「相談する」という行為は、「弱さの自己開示」という側面を持つがゆえ、実行することを躊躇する方もおられます。そのため、匿名性に守られた世界、つまりはインターネット上で誰かに共感してもらいたいといった行動が生まれるのではない

でしょうか。
私は依存症当事者や家族支援を四半世紀以上続けてきましたが、駆け出しの際にある支援団体当事者スタッフの方から「相談はその内容より誰に相談するかで相談の質が決まる」といったことを教えていただきました。いかに適切な相手に相談するかということが重要であり、そのためには、安心感を得られる関係性のなかで「相談する」体験を重ね、あるいは「相談される」経験も蓄積していくことが必要だと考えています。
ゆえに、我々は、今そこで困難に直面している方にとって、援助専門職としてスムーズに支援を行うことはもちろんのこと、文字通りその方を「支える」ような場や時間があるかということにも目配りすることが求められていると考えています。

3　映画「どうすればよかったか」

ただ、知識や技術を持つ専門家であっても、自分の家族が疾病・障害を抱えたとき、適切にケアをする、あるいは、適切なケアを求めて専門機関にケアを求めることができるとはかぎりません。
そうしたことを実感したのは、令和 6 年 12 月 7 日に公開されたドキュメンタリー映画「どうすればよかったか」（藤野知明監督）を観たときでした。私は封切翌日にミニシアターの席を予約して鑑賞しましたが、席は満席で、観客のなかには精神保健分野で働く専門職や家族と思われる方も多くおられたようでした。
この映画を製作された藤野監督の実姉は優秀な医学生でしたが、大学時代に統合失調症と思われる症状を発症します。藤野監督の父母は基礎医学の研究者でしたが、監督の実姉を精神科医療や精神保健福祉サービスにつなげることなく、結果的に約四半世紀にわたり実姉を自宅に閉じ込めて生活することとなります。
「適切な医療を受けさせない」「外に出られないように鍵をかける」という言葉から私がまず想像したのは、私宅監置の時代に設置された「座敷牢」でした。しかしこの映画のなかでは、実姉は自宅内では比較的自由に行動することができていました。父は停年退職後に資金を投じて様々な設備が整備した研究所を自宅に開設し、実姉はそこで「研究」を続けているという形をとっています。
つまり実姉にとって、衣食住も社会につながるはずの仕事も、全てが家族や家庭のなか、閉ざされた関係のなかで完結していきます。戦前に医学校を卒業し父と基礎医学の研究を長年行っていた母もまた、自身が老いて病いを得ても受診することなく家からは殆ど出ることはなかったのです。
実姉の最初の発症とみられるとき、まだ高校生だった藤野監督は、優秀だった実姉の変化、実姉に対する父母（監督と母が救急車を要請し受診させるも、父の指示ですぐに帰宅することになったこと）の対応に戸惑います。父母から説明を受けますが、それでも何かを隠しているという懸念を拭えません。監督は大学を職業後は首都圏で就職をしたことを契機にこの実家を離れるものの、その後、家族の同意を経て、帰省等のたびに両親や姉にカメラを向けていきます。
映画の冒頭でも触れられていますが、これは統合失調症の治療の在り方を世に問う作品ではなく、家族メンバーが病い、それも偏見がないとはいえない統合失調症であったとき、本当に「どうすればよかった」という問いかけもあると思いました。
以下、「どうすればよかったか」に登場する家族です。ここでの記載は、藤野監督以外は監督の目線からの記載とします。
家族構成
父：基礎医学の研究者（本文中の記載は「父」）
母：基礎医学の研究者（本文中の記載は「母」）

長女：父母の期待を担う優秀な子ども。医学生時代に精神疾患に痴漢（本文中の記載は「実姉」）
長男：自分の原家族にカメラを向ける藤野監督（本文中の記載は「監督」）

4「ケアを担う」家族への支援を行う際に必要な見立て

「どうすればよかったか」について、私は精神保健福祉的な視点はもちろんのこと、この「家族」がいったいどういう状態におかれ、どのように変化していくのか、頭の中でジェノグラムやエコマップを描きながら見入っていました。

父母と 8 歳違いの姉弟の 4 人家族、父母がいずれも高学歴で社会的権威の職業に従事している家庭いうことと、実姉と監督である弟の 8 歳の年齢差ということがやや目を引くものの、介護と育児の両立や経済的困窮といった「目に見える」課題は少なくとも見えません。むしろ、父母双方が研究者として稼働し多忙であるため、お手伝いさんが家事や育児を担う（映画パンフレットに記載）など、家庭における「ケア」が昭和 40 年代前後において外注化されている点については、経済的な余裕と、ケアのために第三者を雇用して家庭内に入れているという「開かれた」印象を持ちました。

一方、父母が 2 人の子ども、特に優秀な姉には学習面で大きな期待をしていたことは、映画中のそこここからも窺われます。実姉は 4 度目の受験で医学部への進学を果たしていますが、女性が大学の理系学部に進学することは今ほど多くはなかったと思われる時代に、3 回の浪人を認めるというのは珍しいと感じた一方で、実姉はどのような思いで受験勉強に励んできたのか気になりました。

そして医学部で学んでいた実姉が 24 歳になったとき、この家庭の状況は一変します。実姉は夜間に突然大声で支離滅裂な内容を叫び続け、まだ高校生だった監督と母は救急車を要請し、実姉は病院に搬送されることとなります。しかし単身赴任中の父の意向によって実姉はすぐに自宅に戻ることとなります。父は監督に対し、実姉の状態は「全く問題ない」と説明するものの、監督は実姉の変化を目の当たりにし、何より「家庭のなかで何かが起きているのに、きちんとした説明がされない」と状態に、不安と不審を覚えることになります。

実姉、そして実姉の疾病のことを、それが精神科医という専門家に対してですらも漏らさないというこの父母の姿勢は、実姉の弟たる監督に対し秘密をつくり、当然ながら家庭のなかではそれが「秘密」であるがゆえに、家族メンバーがそれを抱え込むということになっていきます。つまり、家族メンバーの突然の不調に対して不安を覚えている10代の子どもに、十分な説明がされないまま家庭の秘密を守る共犯者を担うような役割が科されてしまうのでした。

家族メンバーの不調や不在などを外に漏らさない（話さないなど）よう秘密を抱えて生活することを（暗にではあっても）迫ることは、不調などを抱える当事者にとっても不利益なばかりか、他のメンバー、特にその不調による影響を最も被りやすい立場の者や、若年の者には、ある意味ケアを担うよりも過酷なものということはいうまでもないでしょう。

監督も同様でした。父母よりは姉のことをある程度客観的に見ることができており、長じて父母に対し実姉の症状や受診について意見し、「延々と議論」（映画パンフレットより）しますが、父母の態度は変わりません。父母は秘密を抱えることで、家庭の内外の境界線がより強固になるばかりか、親世代と子ども世代の世代間境界も柔軟性を失っていきます。状況が好転しないまま、大学を卒業した監督は関東に就職するため家を出るのでした。

今であれば、障害・疾病のある同胞がいる「きょうだい児」としての実家との関係性をどうするか、といったことが論じられるかもしれません。監督の足が実家から足が遠のくことも十分ありえることでしょう。しかし監督は、大学卒業後に勤務した会社を退職後入学した映画の専門学校の課題のため、父母と実姉にカメラを向けてこの状況を記録に残すことを決意します。カメラ越しに家族に対話する時間は 20 年以上に及びました。

「撮影するぐらいなら、実姉に対し直接的に働き掛け、医療につなげることはできなかったのか」という声もあるかもしれません。ただ、私は、こうした状況の家庭や家族と向き合うには、カメラのレンズ越しという「距離感」が必要だったのではと考えています。物理的にも心理的にも厳しい状況に介入するとき、専門職でも命綱（戻ってケアされる場所やスーパーバイザーの存在）が必要だといわれていることを考えれば、想像に難くないでしょう。特にこの家族については、スクリーンごしにでも見ている私自身、内側に引き込まれるような求心力を感じました。外界との境界線は人を拒んであれだけ強固になっているにも関わらず、です。スクリーン越しにでも「内側」に入ってしまえば、そのままそこに溶け込んでしまう（同質化を迫られる）ような心地すらしました。それほどまでにこの家族は、実姉の疾病という秘密を核にして、互いに身動きができない関係性に陥っているのだと感じました。

そして「座敷牢」と称するにはあまりに立派な家屋のなかで、父母と実姉の 3 人が外界との接触を断って長い時を過ごすことになったのでした。

家族との在り方について、「家族メンバーとしてとことん付き合う（最後まで支援するか）」か「全く離れてしまうか（連絡をとらない）」かの二択で考えてしまいがちですが、実はその中間に、ほどよい距離感を求めて立ち位置を模索するということも人にはありえるということを考えなければないと改めて思います。

「父母のうちのどちらかが病気等になれば、病気等ではないほうがその配偶者と娘との両方のケアを担うことになるが、それができなくなったときにうことができなくなる、その時に変化があるだろう」と監督が精神科医師に助言されていたとおり、認知症を煩いながら自身もまた医療機関を受診せず家から殆ど出なかった母が亡くなり、家族メンバーの数と関係性が変化する大きな節目を期に監督が介入し、父も同意のうえ、実姉は発症と思しき時期から約四半世紀ぶりに医療につながることになります。入院と退院後の服薬などで実姉の状態は安定す、3 人の家族は停止した時間を巻き戻すかのように新たな家族の営みを再開します。監督は、久々に外の世界に触れてアクティブに活動する実姉、淡々とその場に「いる」父の姿をカメラで記録していきます。

ただ、父は 20 代で我が子が精神疾患に罹患したという事実を受け入れられたわけではありませんでした。医療機関につながるも病いを経て亡くなった実姉の葬儀の際、父は論文を棺のなかに入れ、それは自分と娘（監督の実姉）との共同研究の成果物であり、姉の人生は「充実したものだった」と会葬者に挨拶をするのでした。

親や同胞世代が、不調に陥った家族メンバーに受診を働き掛けても本人に病識がない場合は受診が難しいこと、家族が受診に向けて社会資源への相談などの一歩を踏み出すまでに長い時間がかかることは、それぞれ往々にあることでしょう。

しかし「どうすればよかったか」では、実姉本人の意思は不明のまま、父母の意向のまま約四半世紀を相談・医療機関につながることなく過ごすことになりました。そこで費された長い時間は実姉の人生であり、その時間は家と隣接した研究所で留まっていました。閉じた家と研究所は、実姉のことが外に漏れないよう、父母がつくった装置であるともいえるでしょう。見送りの際にいたってもなお父は、「充実した人生」という言葉によって実姉の人生を書き換えていると感じました。会葬者への挨拶の言葉でしたが、一方で父が自分自身を納得させるための発言のように感じました。

5 個々の家族メンバーではなくその家族構造をみること

この映画を視聴する際に私が大切だと感じたのは、「個々の家族メンバーではなくその家族構造をみること」でした。「精神疾患（と思われるもの）」「権利侵害」といった言葉にとらわれてしまうと、個々の家族メンバーの病理性などに目が向きがちです。しかし、「家族のうち、誰が悪かったのか」という見方では、この映画の深い内容はくみ取りきれないと私は考えています。

かつて「うちの子に限って」という言葉がありました。子ども世代の問題行動等に接した親世代

が何も知らず発する言葉として、半ば揶揄するような意味合いもあったと私は考えています。
この映画のラストでは、母（父にとっては妻）と姉（父にとっては娘）を見送り、自身は疾病と障害を経て暮らす父が、「どうすればよかったか」という言葉を発しています。
父母はともに基礎医学の研究者であり、家族メンバーの発症に際してもっと冷静かつロジカルな判断ができたのではという批判はあろうかと思います。ただ、この父母の前に、家族の発達過程半ばで（突然）立ちあらわれたケアという「課題」は、父母の想定を超えたものだったのでしょう。育児や介護については、まだ時期的な予想がつきやすい面もあります（ただ想定外のことがおこるのが育児でしょう）し、社会資源などを活用して乗り切ることができる場面もあります。父母はこの時は「お手伝いさん」という人的資源を家の中に入れて乗り切っていますす。
しかし、我が子（実姉）の精神疾患（と思われる状態）については、父母自身受け止めきれないまま、時間が経過していっています。そして
夫婦間連合
子ども世代との境界
社会と家族との境界
の3点が時間の経過とともに厳しい状態となっていきます。
夫婦間連合については、家族形成（結婚）後も基礎医学の研究者として稼働していました。この父母について、夫婦というより研究の同士といった印象を私は持ちました。映画中では特に大きな夫婦間トラブルなども記録されていません。実姉の状態への対応方針等を巡り両者の間に亀裂が入るという場面もなく、一見すると夫婦で協働して「課題の処理」にあたっているようにも見えました。しかし私には、父母が課題に向けて十分話し合いを重ねているようには見えませんでした。「実姉の疾病のことは外には出さない」という点で同士のような連帯感があると感じました。結果的に父母は親世代として子どもの疾病という課題に向き合うのではなく、夫婦あるいは上記のような同士として「家族の秘密」を守るということにエネルギーを割いてしまった結果、解決されない「課題」が積み重なって「問題」となってしまったという印象を受けました。
夫婦として時を重ねれば以心伝心で物事が伝わるというわけではなく、課題を明確化し対応についてぶつかりあってでも協議する場面も必要です。それがないままでは、「どうやって方針を決定したか」「どのような方針か」「いつまでその方針にそって対応するか」が不明となって漫然と時が過ぎ、そこに自分が関与しているとおいう当事者意識も薄くなってしまいます。
一方で、子ども世代への事実伝達をしないということについては一致団結して対応しているように見えますが、それは下記にも述べるような秘密の共有という感じです。
世代間境界については、イベントの写真が残されているなど家族の中の良さが窺われる反面で、子ども世代に対し肝心な時には「何も知らなくていい」といった対応があると感じました。夫婦が親世代として協働して問題にあたる、教育方針が一貫しているというよりは、子ども世代にただただ秘匿する姿勢であり、子ども世代との境界線はかなり固いと感じました。
社会との境界線については、非常に硬く、秘密を守るための強固な殻のような様相を呈し、それゆえ社会からの介入が遅れることになってしまいました。

6　閉じた家族、柔軟性を失った外界との境界線

「座敷牢」という言葉を用いましたが、映画を視聴すると、南京錠で家族メンバーが通常行き来するドアなどを施錠するという簡易なものであることがわかります。病いを得ているとはいえ青年期の実姉が壊して脱出することも容易ではないかと感じました。それでありながらなぜ実姉はこの家庭に踏みとどまったのでしょうか。
繰り返しますが、この家族を家族療法的な視点から見てみると、家族と外界とを隔てる境界線は堅く、しかも、家族メンバーは秘密を共有するということでかろうじて家族の形を保っています。そして外界との外壁は、年月を隔ててますます強固なものとなっていきます。そして、お互いが

身動きできなくなっている関係性のなか、家族メンバー個々の「外界との境界線」も柔軟性を失っていき、結果的に、この家庭は外界から自らを遮断することになっています。

そうなると、外界からの物理的な介入（人の出入り）や情報の出入りは、この家族にとって驚異でしかなく、外からのアウトリーチがあってもはじかれてしまうでしょう。

家族メンバー相互の関係性も膠着しており、現状から踏み出し変化を促すような動きをすることを互いにけん制し合い、結果的に変化をもたらす動きもなくなってしまう結果となっています。座敷「牢」というよりも、自身の吐き出す糸により形成された繭のなかにいるようなものだと私は感じました。

加えて、実姉を医療に診せることなく隔離することについて、父母自身も 100%よしとはしなかったのではないかと私は考えています。「これでいいのか」という疑問は常にあるものの、誰にも相談できなかったというのが現実ではないでしょうか。しかし冒頭でも述べたように、助けを求めることはいわば弱さの自己開示であり、そうしても大丈夫だという社会への信頼感が必要です。

父母は共に高度な知識や専門知識を持ち社会的成功を納めていますが、だからこそ、自分と同じ専門職である医療従事者に対して自身の家庭のことを相談することはできなかったのではないでしょうか。精神疾患への偏見があることも知っていたからでしょう。

相談できる力とは必ずしも高らかに救助を求める力ではなく、社会は信頼に値すると信じて小さな声でも発することを諦めないことと考えます。母亡き後父が実姉の受診などを認めるあたっては、監督の介入に同意したというよりは、父が伴侶である母を喪い、自身も年齢を重ねることで、やむをえず四半世紀にわたった問題を手放したのではないかという印象を受けます。

7　個々の内面を掘下げるのではなく、関係性や構造をみることについて

父が支配的である、母がプライドが高い、といった個々の内面について言及する感想もあるかもしれません。ただ、こうした状況を理解するには、個々の内面を掘下げるだけではなく、関係性や構造に着目してみることがより必要だと私は考えています。

「まさかあの●●が」という出来事が発生することは決して稀ではありません。そうした出来事に接したとき、個々の内面を掘下げるだけでは解決には結びつきませんし、出来事を「ニュース」として消費するだけに終わってしまうでしょう。

「どうすればよかったか」という映画のタイトルを、父の後悔のことばと捉えるだけではなく、社会に投げかけられた課題であると受け止め、対人援助職として、関係性や構造に留意したアセスメントや介入をしていくことが重要であると考えます。

対人援助の場面では、当初アセスメントしていたような展開にならなかったり、マネジメントがうまくいかなかったりすることも往々にあるでしょう。「どうすればよかったか」という問いをあげられない家族もあるでしょう。

そうした場合に必要なことが、当事者や家族の個々の（内面）だけではなく、家族メンバー相互の関係性や家族の構造、そして当該家族と社会（インフォーマル、フォーマルな要素）との関係性についてアセスメントすることでしょう。また、往々にして出来事に目を奪われてしまいがちですが、そこに至るまでの過程、特にその決定の在り方（誰が、どのタイミングでなど）に注目しておかないと、対処療法的な対応に終始してしまうと考えます。

私は学生時代に児童相談所での実習をさせていただいた時以降、家族療法に関する学びと実践を重ねてきました。

この社会には、適切な支援につながることができず、無数の、そして声なき「どうすればよかったか」という当事者の、そして家族の声があるのでしょう。それらに我々がどのように応じていくのかで、社会の在り様は変わっていくと考えています。

参考：映画「どうすればよかったか」藤野知明監督